

式 辞

本日、ここに和歌山大学経済学部 創立九十周年記念祝賀式典を開催するに当たり、和歌山県知事 仁坂吉伸様、和歌山市長 大橋建一様には、公務ご多用の中、ご列席賜り錦上華を添えて頂きまして、誠に有り難うございます。また大学の教職員の皆様、同窓会の方々には多数ご出席下さり有り難うございます、まずもって御礼を申し上げます。

私は、ただ今、ご紹介をいただきました柑芦会会長、並びに、財団法人和歌山大学経済学部後援会理事長を務めております和歌山大学経済学部第十回卒業の萩平 勲でございます。

さて、和歌山大学経済学部は、地元和歌山の皆様の強いご支援と熱いご期待をいただき、大正十一年に創立されました国立和歌山高等商業学校を母体として、現在まで九十年の歴史を経てまいりました。その間には、第二次世界大戦中に和歌山経済専門学校に改称されると同時に、和歌山工業専門学校に改組転換、戦後は和歌山経済専門学校に、再転換されました。昭和二十四年五月には、和歌山師範学校、和歌山青年師範学校と共に、新制国立和歌山大学が発足し、和歌山大学経済学部が誕生いたしました。そして、大学院経済学研究科

が設置され、平成七年にはシステム工学部が経済学部から発展独立し、平成二十年には観光学部が発展独立し、総合大学となることができました。

現在、和歌山大学は四学部体制となり、南海電鉄和歌山大学前駅が設置され、関西新空港にも近く、次の飛躍への基盤が構築されたというべきでありましょう。

これらのことを通じまして、私共柑芦会員としましても、我々の母校のこのような発展は誠に心強く、また、喜ばしく感じている次第でございます。

これまでの卒業生は、高商三、一三九名、経済学部一七、六二八名、経専、短大等五、一二三名、合計二五、八九〇名となっております。

その内、実働の卒業生数は今や、二一、九一八名という一大集団となって、ご当地始め全国各地の実業界、政界、学会その他各界においてそれぞれ活躍いたしておりますが、一方、柑芦会会員として同窓会活動を通じて相互の親睦を図り、母校との関係も密接にし、また同時に、柑芦会関連団体である財団法人和歌山大学経済学部後援会を通じて母校の発展を支援いたして参りました。

そして、今この栄えある九十周年を記念して、ここに祝賀式典を開催できますことは、私共柑芦会員としましてこの上ない喜びであります。これも偏に、ご来賓始め地域の皆様方

のご愛顧の賜物であり、又、歴代の学校の諸先生、職員のご努力の結果であり、改めて、深く感謝申し上げます。

そしてまた、柑芦会をここまで育てて頂きました先輩諸兄のお陰でもあることを強く感じざるをえません。この上は、更に百周年を展望して、柑芦会の団結をなお一層強固にすると共に、母校との関係を強化し、一層の支援を行うことは、我々現在の柑芦会員の大きな責務であると共に、私自身の責任でもあると改めてここに強く感じている次第でございます。

しかし、ここで、今後の課題も認識をしておかなければなりません。

大学の課題は、少子高齢化と財政健全化の流れの中で、国立大学の再編統合やグローバル人材の育成などが報じられていることでもあります。大学の特色や独自性が問われることになるのだと思われまます。

同窓会で言えば、利用してほしい若手会員が、多忙と同窓会の味を知らないため、折角の「成長と安寧の場」を余り活用して頂いていないことが残念であります。

なお、本日の記念式典におきましては、前回の八十周年からこれまでの十年間において、経済学部の発展にご努力頂きました教職員の皆様、並びに柑芦会活動にご貢献下さいました役員の方々を表彰させて頂きまして、感謝の気持ちを表明させて頂いていただきます。今後なお一層のご活躍をお願いし、又期待させて頂きたいと存じます。

本日も臨席の皆様方には和歌山大学経済学部をはじめ、四学部に対するご支援ご協力を一層強く賜りたくお願いを申し上げます。あわせて、和歌山大学柑苜会並びに、財団法人和歌山大学経済学部後援会への益々のご協力をお願い申し上げます。

以上をもちまして、誠に簡単粗辞ではございましたが、今後とも和歌山大学経済学部の益々のご発展と、また本日も来臨たまわりました皆様のますますのご健勝とご多幸を併せて、祈念いたしまして、式辞とさせていただきます。

平成二十四年十月十三日

和歌山大学柑苜会会長

(財) 和歌山大学経済学部後援会理事長

萩 平 勲